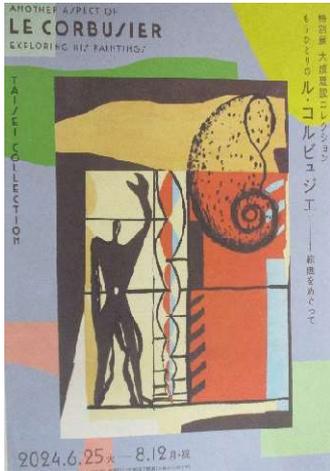


もうひとりの「ル・コルビュジェ」 — 絵画をめぐって

大倉集古館（虎の門） 24.06.25～08.12



「ル・コルビュジェ」(1887～1965)は、フランス・パリを拠点に活躍した建築家で、東京初の文化遺産「国立西洋美術館」(上野公園)を含む7か国17施設で構成される近代建築文化に影響を与えた。

巨匠は、建築のみならず、絵画、彫刻、家具製作にも取り組んだことで名高く、本展は、もうひとりの絵画を巡って「特別展大成建築コレクション」として開催がされている。展示作品はコレクションからの「約130点」で、美術作家としての詳細が紹介されているので興味深い。



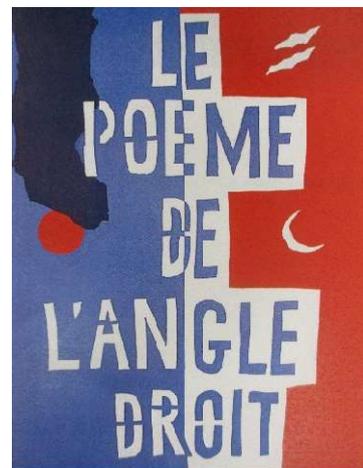
《牝牛 XVIII》 1959年 油彩/カンヴァス

画伯の戦後の作品には、不思議な記号のようなものや、空想上の動物たちなど、物語性に富んだモチーフが好んで描かれているのが特徴である。

本作は、「牝牛」の連作のひとつで、反った屋根の形は獰猛で生命力溢れる牝牛の角を思わせ、耳は音響的で響きあうことの象徴であるとされている。



《奇妙な鳥と牝牛》(タビスリー) 1957年



《直角の誌》版画 1955年